SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

学習活動に課題を持つ生徒に対する支援：数学を題材にして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西野, 悟史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007242

学習活動に課題を持つ生徒に対する支援

－－数学を題材にして－－

西野悟史

1　はじめに

筆者は滞在実習校において、学習に課題をもつ１人の生徒に対して多くの教員がその改善に携わっている姿を見てきた。また自分自身も「学校組織外の人間」ではなく、教員のうちの１人としてできる限りのことを模索し、そして現場の教員という視点と、第３者としての視点を意識し支援に取り組み、その中で学校の主軸となる授業において、個別の支援の工夫を取り入れていくことの必要性を感じた。

授業において個別での支援が全体に行き渡れば、またそれを授業進行に支障ないように効果的に行うことができれば、よりよい授業づくりが今後展開できるようになると考えられる。それでは具体的に、生徒はどのような支援者の取り組みに対してよい表れをするのか。どのような工夫によって効果的な学習が行えるのかを検討した。

2　取り組みの目的

問題や課題を抱える生徒に対しては、問題への対応だけでなく、問題が起こる前にいかに援助をしていくかが重要な課題であることが指摘されており、つまり学習だけでなく、生徒が学校での問題行動を起こさないための取り組みも求められる課題であると考えられる。そのため生徒が支援の中で出した良い表れが、どのように取り組むことで出るのかを知ることは重要な点である。ゆえに筆者は生徒への学習支援に取り組むとともに、良い表れにつながる働きかけについても探求したいと考えている。学校生活における良い表れにつながる働きかけを知ることは有益であり、またそういった働きかけを他の生徒指導にも活用できるようであれば、より支援としての効果が期待できる。

よって本研究では筆者が個別支援に関わり、生徒の学校適応、特に学習面を支援していき、その取り組みの中で生徒を支援するために必要なことをアクションリサーチの手法を用いて模索していくことを目的とし、その実践結果について考察を行っていくこととする。

3　研究方法

滞在校において、2 人の男子生徒の個別支援に関わった。

男子生徒 A の抱える問題点としては、「授業態度が非参加的である」、「字が乱雑である」、「学習に課題がある」、「わからない部分に対してのアプローチができないことが多い」といった課題がある。また、男子生徒 B の抱える問題点としては、「遅刻、欠席ともに多い」、「学習面に関しての課題が多い」、学習面での傾向として文字や式による操作を特に苦手としている。これら 2 人に対して以下のような内容を実践し、その経過を考察した。

○　滞在校に週に 1～2 回滞在し、クラスに入り授業や個別支援を通して生徒の支援に参加する。

○　滞在期間中に筆者が行った支援や、中学校の教員と連携したこと、その日あったことをポー

トフォリオにまとめあげ、現状を把握し、生徒の課題を抽出・明確化し改善計画を滞在校と検討し、実践→リフレクション→評価→新たな課題の発見という PDCA サイクルを用いたアクションリサーチをしていくものとする。

○ 個別指導をする中で 1. 教科教育、2. 学校生活適応の 2 つの観点でもって良い表れにつながった支援を考察する。

良い表れにつながった働きかけの中で、別の生徒での再試行を試みた場合を比較し、共通する要素を挙げ、どういった条件でうまくいくかを抽象化させ一般化に近づける。

4　生徒の持つ弱点と支援

●非参加的な授業態度

・要因

生徒の様子によると、まず小学校からの学習の積み上げが少なく、中学校で持っておくべき既有知識が少ないこと、またそこから授業についていけなくなるため学習意欲が低下し、より授業への参加をしにくくなるようである。

・支援ポイント

勉強をして学習する習慣がないため、定期的で継続的な学習支援をすることが重要である。また、学習行動をＡが取ったときに支援者が行動を評価し、学習意欲を持続させることも併せて重要である。

・具体的な支援方法

筆者が支援に入る前からＡへの個別指導は始まっており、支援を始めて間もなく、個別支援を週に 1 回だけでなく各教科の教員が空いた時間を用いて行うこととなった。基本的には週に 1 日 1 時間の個別支援を約半年行い、そのうち 2 ヶ月ほどは各教科ごとに 1 日 1 時間の個別支援を行うことが出来た。

・支援の成果の観点

授業参加時の取り組みの様子によってその成果を見取ることとする。

●乱雑な字

・要因

字をきれいに書く意識がなく、また乱雑な字に対して指導を受ける機会も得られなかったためであることが考えられる。

・支援ポイント

個別支援をするときに学習支援と併せて字を書く指導をする。またその際に心がけることとして、急がさず、量をこなすことにこだわらず、丁寧にすることに重点を置く。

・具体的な支援方法

個別支援の最初に自分の名前を丁寧に書く練習を行った。文字を書く反復練習に効果があることはもちろんだが、書く内容も書く人にとって意味のあるものであることがより効果を出すようである。その中で書く機会も多く、自身に関係性の深いものということで自分の名前を丁寧に書くといった支援策を大学院の教授に教示してもらった。ただ書くだけでなく、場合によっては枠を作り、薄く見本をつくり、その上をなぞるところから始めることも必要である。

・支援の成果の観点

生徒の書いたテストやノートにおける文字を、以前と比べてどうであるか、読み返せるか、整っているか、といった観点でもって本人をはじめ教員が見て評価する。

●課題のある学習状況

・要因

学習習慣がなく、また全教科にわたって基礎的な知識が不足しているため、定期試験を始めテストでの点数は低い。数学においては授業内容も既有知識のいらない導入程度であれば理解はできるが、内容に入っていくにつれ授業内容の把握は困難なようである。

・支援ポイント

既習内容を用いることで解ける問題を段階的に設定し、できるところからつなげていくように学習課題を選択する。また、取り組みに対しても本人の学習意欲を強化させるための工夫を盛り込む。具体的には、個別支援で行った内容を次の定期テストの内容で反映させられるように、問題をこなすだけでなく、ポイントを押さえた指導を意識することが重要である。

・具体的な支援方法

筆者が行った学習支援は自身が専門科目にしている数学であり、学年主任との検討から中学校で用いられている問題集への取り組みをすることを主に行った。

・支援の成果の観点

具体的な数値的変化として、定期テストにおける点数の変動をAの変容としてとらえる。しかしそれだけでなく、テストの内容や、取り組みの内容の変化についても学習状況の変容として考えるものとする。

●わからないことに対してのアプローチができない

・要因

学習に対してわからなくなると、早くにあきらめてしまう様子が多くみられた。良い評価を受けずにいるため、できないことに対しての挑戦する意思が低下しているためと考えられるが、アプローチができないのは、支援を求める手段を知らないためであることも挙げられる。実際に個別支援をしていても「どこからわからない」かがわかっていないことがあった。

・具体的な支援方法、支援ポイント

隣につき、わからなくなりそうになるときにすかさず支援に入るようにした。またその際に、何がわからないかを説明できるようにしていくことで、自分がどのように理解して、どこでつまずいているかを支援者に伝えるように指導をする。

・支援の成果の観点

授業、個別支援時における挙手や、助けを求めるといった教員への支援要請の様子によって成果をみとるものとする。

●遅刻、欠席の多さ

・要因

授業に入って行けず学校に対する魅力や意識が低くなってしまっているので、登校できない。またその連鎖によってより学校への登校頻度が低くなっている。

・支援ポイント

登校刺激を用いて学校に来ることを定着させ、またその中で学習活動を取り入れていき学力をつけていく。

・具体的な支援方法

動機づけのために、生徒のやりたいと言っていた楽器の練習を個別支援の中に取り入れることによって、学習機会の確保を試みた。また、回数を増やすために 3 年生の後期からは個別支援の時間を増やし、より学校への帰属意識を高めるようにした。

・支援の成果の観点

B の登校状況の変化をもって変容とする。

5　生徒の変化と実態

男子生徒 A について

授業態度が悲参加的である点については、指導されながらとはいえ、自分から個別支援を増やしてもらえるように教員に働きかけるなど、変わろうとしている姿が多くみられた。また 3 年になって A の個別支援は完全になくなり、全ての授業において出席し、課題に対しても積極的な取り組みを見せている。字の乱雑さについては、授業においての筆記をノートに行い、字も後から見直しても読めるものへと変化した。学習面の弱さについては、成績評価が 1 であったものが 3 に上がるといった具体的変化に見られるように、向上していることがわかる。また授業においてわからない部分があると支援を求めるアプローチも少しずつできるようになってきている。

男子生徒 B について

遅刻や欠席が多い点については、登校のための動機付けを行うことで個別支援をする日の欠席は減ったものの遅刻はなかなか減る傾向がなかった。より学習支援を充実させる必要があったので、B の希望する日に新たな個別支援を設けたところ、学習面の弱さと学校への適応が改善する傾向が見られている。

6　研究より、学習支援に有効な支援策

(1)　生徒の誤った理解を、正しい方法や適切な解決方略を示すだけでなく、生徒がどのように解いたかを内省的にモニタリングさせ、問題を解く手順の大切さを強調した上で適切な解決方略を教授する。

生徒が適切でない、または効率の悪い解法を身につけている場合、生徒自身にどのように解いたか、それぞれの式を用いた理由を認知させた上で、答えを出すことよりも、答えにたどり着くまでの過程が大切であることを理解させる。その上で適切な解法を学習することで、学習への効果が期待できる。

(2)　一般式や文字式においての視覚的な支援が有効である。

例えば一般式において、変数と問題文の対応する係数とを色分けするといった、その文字が問題文の何であるかを視覚的に理解できるようにするといった工夫である。

(3)　問題に対する方略や解法を生徒に説明させ、それが正しいのかどうかを確認していくことで、適切な表現や正しい答えによる生徒の達成感や、自分なりのできる方法を確認することできる。

(4)　生徒の要求に対し教員や支援者がそれに応えることで、生徒の学校や学習への取り組みが積極的になることが考えられる。